枇杷園句集　坤

へ 5
1896
2

枇杷園句集巻之三

秋

初秋

きのふ秋の川流れをたてる小さき風

獨坐

松の露は落ての秋しるひとりかな

ちゝめくや秋来る竹のぬれ雀

菴の戸へ拾ひ入るゝも桐一葉

星夕

かも川やかれやらつける星み夕
ての川紀のすゝみるもみえて星
小あひ戸鳥もゆくらての川

舟行

一きれに舟漕入色よてみ川

灯籠

灯篭の油なうるゝ　榎一の車

露

檀渓

露にきるあるも誰往なれこゝの茶の煙
ゑふ外法師かむかうりの追福の日
まりふみねこゝ思ひおる人くハ
丹波のまゝ法師　葉津の

紀風与里

白露ふ氣あつめ来るおもひろなゝ

いなつま
いなつまや顔ふすましき庭の松
山よ添ふそし稲妻こゆる海の上
舟よりもなかなかるすらす
稲妻や风つく庭の塘か那
秋風
あきか鳴や舟よりも舟へゆくかす
秋風の吹きそうし松蔭の月

須磨寺ハ戸を守るよりあきの蚊か
悼松兄
むつましきかぎりを師弟の中とハいへハ
あしくはし此松兄ハ所々をへる子の
まて年のよハひもにとのく老を捨てハきこえ
先さつましきなふひなるにおふ孫
なけきハ何のすそや
秋風やりかもなき　花の露

朝㒵

ひやゝかに蕣のさく垣ねかな

朝きらぬあさ㒵ハ亀し飽なく

いくほどの世をおもひまいの枝

蚊屋ごしに蕣見ゆる㒵ぬ哉

萩

露萩やむすひ捨たる縄きされ

のぞくまでものかゝる萩の夕の庵

よきほどによこたふ萩の小庭かな

桂五亭

よきおもとて玉写にも居よう萩芒

萩に志をれ芒にかゝる西日かな

萩

虹の根や落ゆく海の花の露

ふれとてもさゆくりの花の露

女郎花

道しるへしてやこちらをまねくなりけり

花

陽炎の秋にもあへり女郎花さ

花よりも白きすゝきをあすゝ紅に

淋しさに手へてや誰か花なる

雲きぬのさゆふ日のきれ花ちる

都よりす

清梅のすゝきをかゝる雨后に

艸花

きるみちなく日のさびしさよ艸の花

稲花

湖の三川のひくきよ稲の花

萩

明る夜のあさしを鳴きりきりす

きりきりす鳴やいつまで風のたえ

雁

一行に春日のかゝる河原かな

かちりやられ〱す一行の雁哉

十日前より萩咲しきて一行の春

一つらに鳥のましろ雲の雁

三河の國棋堂を詩ふ日

小舟に棹さして矢刻

川の下流にあそふ

まつ一つの秋のくせ四ふ夕くれや

童謡

雁ゝ竿になれあれの一つ先へなれ先の

一つあとになれ鍵になれ竿になれ竿に

なれ鍵になれ一つになれ

一つひとつさきの宋にそなきにけり

鶉

わら春午おきれしきるひきさる鶉哉

鴫
暮れてすこし鴫もありや世

砧
小夜きぬた寝覚のひかりをあはれ之
小松吹伊賀ハきぬたのゆめ哉

芙蓉
月雪く芙蓉日くにも風の露

月
宵々に来るもあかれた月を友

須戸行
ひむろ雨の峰し
おもれたあやし杞
小家にたしなき入る月
海人の家ハ袖にもあまる月の宿
あらしへゆく世とする暁
吹ノすまれ 煙るも月の名残哉

あらしよミる

月ミるく為の◯低く浅路ミ出

筵の家を覗ミすあやしく月夜の

ひやくふし月ふ寄ある木写の事

萬代や山路の一すじ以ふ見月

松の什路もや月よてと有よなる

名月や以ふハめてさき月夜哉

月見とて沖けき御とる小橋哉

十五日山行

おれし人と同しつすしてあまふ和とおもしろきまのハ家しされハ二日三日の月路ころより例の人てかなふひのハして南陽の毎の住る露も家山の紫の菴をとふ白雲跡をかくしてつの来し道もさころものすそ以ふきしさなから思ひしよりハつと深くて市中を去つす

わづかに一里晴嵐変を廻りけり
現に秋色に染まり入る木々の梢色
月をまちまてよその日みれ初るを
ことに嬉しく覚ける

松やまを枕にあてゝ月見かな

雨の日信濃にゆく人を送りて

姨捨を雨にのかしぬいさよふ月

雨晴山月高

海山を洗ひ得ける月夜哉

中秋無一夕雲月を惜みていふ
十五夜雨ふりて峰風木をさる
なかり候あはれなるすれを揚す

峰あをなかめしつゝ有月

秋の花をも眺ても志はし月夜哉

白図亭

古きよや光の寐さめに有る月

卓池亭

旅もそゞろ月に侍まる菴の聊

山家に宿かる月のけしきおもしろ
けれともやくも麻すゝまねの武蔵
ころ雁の声ちかく来ることなく
ゆふ耳待ものなれやものの
ことなはむとかをあらしぬ

夜あけても花のあかり　蘇竹 月

画賛

あきを答ふひとけの膝も月夜かな

贈 伯先四十賀

千代の坂路のはじめは雪も花の名
月のかたりはてとまなくも

おもしろき年よるひとよ月の秋

とまりにハむしろ更しむか月のかて

硯静亭

いさよひや月にちかり行く藤の香

八月十六日瓢舎にて

てるをしるの

十六夜の雲にぬれ来る　瓢か舎

井戸田にまる

れさよひもてるまの月見る在家かな

十三夜

梅れる孫田にさ川人も月見かな

三河紀行

空也上人ハおのれもとより家も世人にハ引

ちえるをおはしのれのそわか住かひ

なる山の菴のさひしきところ知れ

四条の辻に蕭しろ引しまる住

まりそハ行徳を積みきるにて斗上あ

山とよこそあはれ哀くかなしけ
東し画庭の砂にてもおもひとるへき
わさにもあらす山にそひ水にそひぬ
まほゝうらやましき三河の國におはし
ふしきなるひとくをかたらひおもてそこ
なり大樹寺にていふ此寺にまうつ時は九月
十三日なりけるを又殿の山なみを以ふかる
あまた清浄満宗にしてるすゑ宗の

底には水影を湛へ白雲の頂には秋の
色をとゝめたるありさまなかれは
とて錦なす山岩根の雲をわけたるを
まかしぬ

　名を得たる月なれはこそ秋の人

　　秋某

秋の夜や　望よりける泛圓

秋のあはれありさまを思ひ述しけるを
書なるにおく十ひとつをそへて出らるゝの七ひと
まかせてあまりあまり心にまかせつゝしきすさひ
ろなれこそものしをろそへあられも
ことに古へ人のなれひふるし来る古言のことを
みなのこるかきさしやさしきをしや寄引
くしこゝのかは歯がね漢しく宋すして
西行法師のあとを思ひつゝしく

さのみこそものすること作らせ朽木代
朽木はちまよくゝぬかさへらう思ひ入ままて
よこき木うけるから山の奥すも庵の中は
おもすみよしとは誰人かおもふ為記
好そこの心をひきたちかへるゝかゝふく月に
さしむかふ木のけしきこそあはれは深き
秋の夜そて
前さり前
山のおくふかも

秋

秋雨

秋峯の菴にて

住なれしさとこそよけれ秋の雨

こゝろも浦にて

秋の夜あとところくにはゝ入ぬ

彼岸

暮るの蟋に豆よくひゝんゝな

秋山

枯るゝろしき松こそそゆも秋の山

秋水

鴛鴦鴨の毛たゝろも染よあきみな

鹿

鹿売るの書きしと廣郁もあらん

行めいけもすし ゆけハ鹿の声

さる山雪江の菴にあそひて

門出て聞ゆくひとも鹿し鹿の声

秋葉山の麓和田の屋にて
いふやふたつとりこの
啼鹿のあらましも深き栖かな
明ぼのゆかしくも鹿のいはゐ

菊
志らきくの山路わすれぬもあはれく
むさしのに紗ハ老られぬきく花
送花叔帰故郷

父母を見るなつかしさも菊の花
訪草菴
うらやまし菊もつくらぬ庵の庭
白露のしらぬあはれか莫きくか
菊おほに菊のかもあすハ重葎
於中九日
生ひ人に一枝くれよきくみたれ

冬菜

うへ置れハ水になしく冬菜かな

秋暮

西に入る山のなきにあきのくれ

よい月か有やうかくするそ秋のくれ

大蕪亭

日の入ぬ日ハなけれとも秋のくれ

菜山子

おもしろきひと只ありこまかしかな

無題

蜻蛉の十ちり泛く枯枝かな

稲まくや刈や田に棒て夕かゝる

片扉閉まゝくるしき麁か耶

松かさよ松露よ菴の灯ハなし

悼如東贈帯梅

あきさしりの人の俤さへつれてゆく

八月八日の日遊行上人を江の國へわたるを
みふとてひしめくやうて四十九院といふ
所ふに作りたる寺の内をさへ伝へ聚めい
おもろかしきかれ縁の上をわたりすきてゆと
結縁まて申しくたる

おもろかしあさや遊行の縁の中

東次アおて

何をしらぬひともいふなりすて次第石状

九月十三日を江の國
有ふかしいふなるまて
月のかけ日みるに浮り

不尽しのやう

卓池輯

枇杷園句集巻之四

冬

時雨

まつ時雨る程もなう青野ありといふなる
野あたりにてしくれにあひて鎧の跡

竹葉軒

さゝ舟にきやしく雫降しくれ

隠居や古人かやうの小夜しくれ

芭蕉忌

世にふるハさらに宗祇の時雨哉

素堂ハ芭蕉翁の善友なるを一日風農
また我の破れやれく霜の荷葉のうるを
を悲しみ世の形見草つまとて甲子
吟行を編して曰静なるおもむきハ
秋色の花に似たりその牡丹なつかさるハ
隠士の句なれハなりけしおもむきこそ静なる
趣を慕ひてその手向草とし

月時雨さりとてハ
　古きけしきかな

ひとゝに飛そしられるも須广明石
山茶花に手をうけあれも時雨るも

　茶室迎友

宮ありしみなるやしられるの松のうけ

おしかれに小鏡饒なる白ひかな

東門公子と申すなる公子おはしましけれ
雪埼のみぎはに狩くらして小獲もの
あまたありし中に一ひとつを平の士文字
に下さる此士文字琵琶の上手なれ
なんありけるこそそれに呉掬ひていふ
家の子ありちか比あやしみに思ひける

いふ琵琶造りとおしてそのまゝはふせさせ
そのまゝ入る家の面ありとて人々みな入
けるにふあそこの一人出るひとりける
あたりなり萩貞検校その家の宗匠
として四絃うきなかりしなきなれ
嘈に切てと寄をましへまてに
あきれみしその時雨も月もかしきを
また二ひぬ

時雨来るかきりなるの琵琶の上
かゝる夜のあはれき海こそ世の勝つらす
ちかふとなる琵琶ひきのこと葉をつらぬ

落葉

落葉ちらく朝のすゝ風夜をさらさて
あさくや落葉掻下す屋根の上

不破の関にて

霜ふあけゝるの鼻ふく落葉かな

大和の國を行脚して畝火のやまを
いはこ耳なし山をとふに尚ま
あはれく此のあたりに樵夫の立さるを
呼かけてそのうくもの申さんのうく
もの問むかしぬけと咲とりむるけ
しきまなれけれとも
此人も耳なし山と落葉掻

木枯

こからしやくさハ畑へ飛ふ池の鴨

梅宮ゑす

こからしに日もとからしの苔の上

こからしや白ふく鶴登のはゝき

こからしや海一きれにかゝる月

網代守

宇治の妻あまたゆしろにそへる思ひ

千鳥

生海鼠ふれ袖のこをさも啼ちどり

柿もやい殿のうちみも啼しかより

五道亭

鷺鴨からけて枯ろ芦辺哉

大津にて

湖を野て埋まる あけかな

冬月

あくまでも寒にさえる冬の月

さむくふし苔ふむ冬の月　夜戯

きぬくせし峰あくせや冬の月

大魚追悼

泣ハ笑なりてハ子よかれ尾芭

枯蘆

あつましら住やられ(?)まてありとなる

詩仙堂帰路

丈山のさびもしれゆく枯野哉

訪野萑

かれしくやみもまたお向ふ庵の犬

麦阿か菴を訪ひて

これ見よかし霜の田芹を菴の窓

芭ふからひ月よちきる夫妻の枕　冬之

五百生の宿縁にしもあらて一夜の露にも
きえぬなそなかかきまの家も此悲し
子亀をそらの中にはなしきとみとり子
孔雀なるあかいまさきへいかて出てハ
あゆめかしはふかうりふハたかうてなちる
あかしの実一つを見るこちかうる足し
又なさきちなくしもあうそものちかうかく
山吹の実や霊のそこさ枝かな

輕沼のさかしを跪る寄に
ゆく

雉

雉も鳴す犬も東あれ丸山をみ

氷

勝山を舟さしくだせハ藤代ヨりきヨし
ささ日を見す風あつく雪さへ
降きさちるさへを織す
白浪のうけるすハ氷る小さらな

冬木立

芭蕉翁百回忌

千句巻抜

ちからよるもの世をしらぬ冬木立

雪

まつてに雪の木ゝ山見えよりも

あつき雪や人のしれぬるひの木笠

曙やあふしの雪に埋れけり

雪掃やつゝあとへ外ぬ中雀

さいつても雪は峰なるも奥山家

月雪やこよひも月は雪の内

霰

笹にちるあられ雲にさはる花もなし

許米まちし文

あともなき廉さるの友で許米まちし文

南岳月夜も角世を見る時る許米まちし文

歳暮

年の歯さに寄むかしきる日末表水を
いふ流はゆく夜に湖水あるを橋か洞と
いふ藤竹をうち突水を冴ゆる其
上におつ池塘尾花枯て雪のごとく
鳧鴨亂沈むの水底は清し是より
路を西にと色といふ菩提中に廣く
空ゐるして民家遙は見ゆいさや年の

国意はよて蓬莱のかざり松鶯架
やりのまた引よりあ
ゆくとしの廿九日も子の日か亩
或いはしむ月の一日をうしきもの三五
然暮雨苍の大人はいさなみまれて共に
子日をしなは竹にあけ柳にらん
すかみてまず月雪水のさまりつ
おもはずも亦夜にめくる未るの一年此

始終を杢によせらるゝすいとめてさく
少し惑ある也

野秀亭

候たきや始の鴬うる藪のうけ
ゆくゆくしのこゑりとも七ぬ山ぁい
年もたちや小松のも来る日市上ら

立こゝす童戯を見る
少しられぬ杢菜角力のあふそひ

芭月一葉のあらいにけふの日も
既よられたるゝ少しもたちや一瓢の
酒の強ミまくあく出かけ
くゞ少しられぬ

瓢雪こゝす

鉈おさへこゝす

蕉雨輯

枇杷園句集巻之五

雜

倉澤

ゆふも見てくゞるぞ不盡の山

よしの馮月か四十の賀に

よしの山ゆきハひとの戀しき

大せつに環なき寶のよはひ哉

住のひろゞかしこさ外の春哉

海人の子等の朝の干潟におり来つゝ
汐木拾ひあるきけるかゆらす汐ち
来れハ乱れ芦原をさしてそ帰りけり
きて翁うしなるもあらはとおもひぬる
浮のなくなれハ春うくにてあるもうす
多くの鶴の鳴ゆくハ幾千代をまつる
あらんと心ゆめてよし

寄嘆ハやすらひところと和哥の浦

大黒賛

花よ實よ四時かやうの子の日子

多春園の桜見せさせたまふなりける、
うつひ侍る泉石のやうハ中されぬ椋
木を植るためして子のことく植させたまふ
七日の日早き桜ハちるも浮ひて汀のけしき

さゝなくおもしろし夕れ公の上
漕出て見る気色の景色もおもひ
やられ侍る花の漕出よ小さき舟とハ侍
きず侍れとこゝろよろしとふんも似合ず雲
あつまきさその五文字ハ収まさとしのきれ達
さくら木深き所るにかいまきその停雲
図ニ無之

朝上停雲雲在花深處

暮下停雲花深雲未去

若津晩望

東望三千五百峰晩雲中断
出芙蓉芙蓉白雪千秋色去
入霧林照古雲

平曲會式

床頭置琵琶二面
彈中或弦断 則頭設一面

無以代之
曲中業談笑吸烟管歩
唾壺必應有意凡曲調
者貴欽賜々々則説盡

山中せ限らす

賞る称あつこ海やらに月の光

宗長

何の木時よりあやしん歌のもとまて連歌

あそたきれけるに山居きこる水のをまみ
山のさかりその白楽あわ住らなしく
おほせいとそのもちて潔壺に雲の枝を
赤入さるこるするをとゝめ絃へるもあり絶
なすまこそ

曲終不收撥更唱祝世之句

峯生助言

ちとふきさ孫曲絃らす

撥を絃のうちにたのむ

脱袴

把盃

洋溢在心形意已忘蕩然

山頽亦復不妨

瓢欽亭

形便ことしるすみつから不用の文を

生好て自然を常のしむ瓢有ある翁

の是に一日をひきまたハ居然としてる

忽有用身将取して来る赤人の草西行の

庵の落花三昧茂那性の説の夜古ことを

大師の風月芭蕉坊翁の二子雪駄の

風雅の藻思まよもみなおし入これを

さらに便ことしてる磊落衆瓢翁し

て云て曰わら自然をうしなえりわら

自然を失へり翁叱して曰世に炭を
もらハ何といはん曰寂し酒をもらハん
何といはん曰躍し米をもらハ何とい
はん曰静なるも又叱して曰呆なり
世何そ自然をそのしなんや瓢惘然と
しるゝ歌て曰

鳴く櫻をつきれされ鴎
同し流の藻塩草　盧瓢

鳴く櫻をつきれされ鴎　盧瓢
同しきられのぬる瓢　盧瓢
あれれもち冬の海　盧瓢

松兄輯

識

此樹乃以前者ハ〔わすゝ〕あ里
一年三百五十余日風月花
鳥を述懐し孫ちらしうす日ゝみ
狂吟す当大紙三百句
自ら発起乃まつりし八九
集ハ愛ゆる人集つとこゝにまて

年ゝ波自乃孫ちハ九を撰以あ
つめ年狂雲園句集を世に
かゝて風月狂吟乃大境に至ち志る集ハ
弥道乃狂壇とならふへし

角足庵

岳幹